

盲知的障害児における文字学習とリテラシーの実態把握と支援に関する研究

所属校：東京都立八王子盲学校
氏名：阿部智子
派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：盲知的障害児・点字学習・リテラシー・学習把握表

I 研究の目的

1 はじめに

東京都における視覚障害特別支援学校では近年、複数の障害を併せ有する児童・生徒の障害の多様化に対応していくことが求められている。こうした現状から、増加傾向にある盲知的障害児の学習の実態を把握し、教員間でその情報を共有する必要があることが指摘できる。盲知的障害児においては、視覚情報の利用が極めて乏しいために、音声言語の語彙の内容が乏しくならざるを得ない。この点について、点字学習の導入に伴い、音声言語との対応関係が明瞭になり、コミュニケーションに用いることのできる語彙の拡大につながっていることが考えられる。また、コミュニケーションの中での点字の利用の拡大に伴い、さらに、音声言語の理解も深まることが推測できる。

これより、盲知的障害児の学習の実態把握において、点字学習の習得状況は重要であり、どのように点字を活用しているのかということは、把握する上で重要な項目となる。文字などを生活場面で活用する能力はリテラシー（読み書き能力）と呼ばれている。盲知的障害児の教育における課題として、文字学習とリテラシーの実態把握の手続きについて明らかにすることが必要な課題であることが指摘できる。

2 研究課題 (1)

盲知的障害児の学習把握表の開発と信頼性に関する検討

盲知的障害児における読み書き学習の習得状況を把握し、リテラシー支援を行うため、文字、読み、書字運動に関する心内辞書の相互関係を、見本合わせ課題により評価する方法を学習把握表として開発し、その信頼性について検討を行うことを目的とする。

3 研究課題 (2)

学習把握表に基づいた盲知的障害児の点字文字学習に関する検討

開発した学習把握表を用いて、点字文字学習の実態把握を行う。また、点字の書きと読みに関する学習習得の達成順序の特徴とコミュニケーション行動の発達の変化を検討し、盲知的障害児の点字学習の習得プロ

セスと効果的な学習支援に関して考察することを目的とする。

II 研究の方法

1 対象児

視覚障害特別支援学校4校の小学部、中学部、高等部普通科の重複学級に在籍し、点字学習を行っている視覚障害と知的障害を併せ有する生徒46名（小学部15名：1年2名、2年1名、3年2名、4年4名、5年2名、6年4名 中学部17名：1年8名、2年4名、3年5名 高等部14名：1年6名、2年6名、3年2名）。

2 手続き

研究課題(1)では、文字学習とリテラシー形成のための学習把握表の開発を行った。学習把握表は、「ひらがな文字」、「ひらがな単語」、「特殊音節の単語」の3項目25種の学習課題により構成した。それぞれの課題の下位項目として3種類の指導課題を提示した。

リテラシー支援に向けた実態把握のためのリテラシーアセスメントに関しては、AACアセスメントを参考として、視覚障害特別支援学校教員の意見を聞き作成した。作成した学習把握表について結果図を作成し、縦断的検討を行った。

信頼性については、 κ （カッパ）係数によって対象者を担当する教員2名による判断の一致度を算出した。

研究課題(2)では、学習課題習得の得点における習得状況と達成順序についてオーダリング分析によって学習習得モデルを作成した。また、学習課題の達成順序とコミュニケーション行動の発達の変化の関連について、学習習得の平均得点別の4つの習得群での検討を行った。

III 研究の結果

1 研究課題 (1)

作成した、図1結果図の事例Aについて、縦断的検討を考察すると、リテラシー実態把握表における本人のモチベーションが上がるにつれて点字学習の習得の状況が向上してきていることが把握できる。リテラシーアセスメントは、学年が進むにつれ中学部では「環境」の把握、高等部では「メディア」の利用などが評価され6角形が安定してきていることが指摘できる。

点字学習における、文字の習得の課題に関しては中学部段階から、触読への抵抗感、拒否感が減少し、点字の読み課題が容易になってきていることが推測できる。高等部段階になると、リテラシーアセスメントの安定が、文字学習への相乗効果として表れてきており、点字の書き、読みが良好、もしくは達成途上と評価されていることが指摘できる。

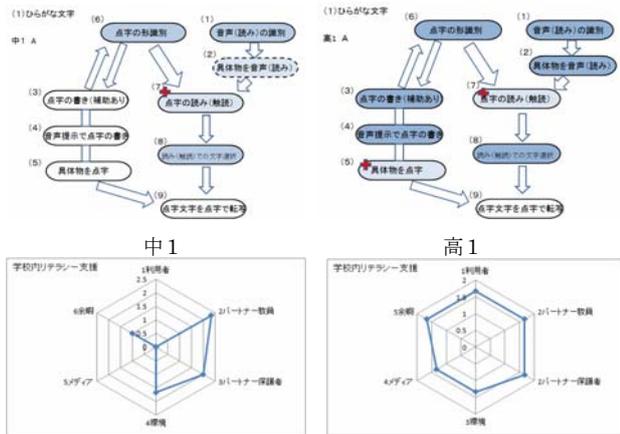


図1 学習把握表結果図

ひらがな文字、学校内リテラシー

事例A 中学部1年、高等部1年

学習把握表の信頼性に関しては、分析した計15例中13例に統計的有意な判断の一致が認められた ($p < 0.1 : 5$ 例, $p < 0.5 : 8$ 例) ことから、質問項目の設定としては盲知的障害児の点字文字学習の学習把握について判断しやすく、教員間で高い信頼性をもつ評価が可能となったと考えられる。

2 研究課題 (2)

点字の書き

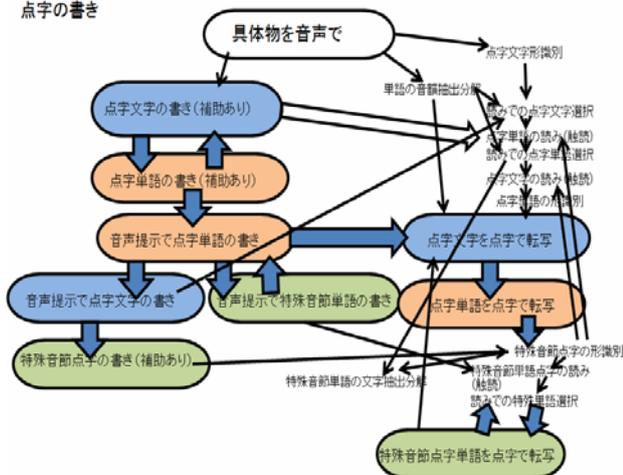


図2 盲知的障害児の点字の書きについての学習モデル

学習把握表のオーダリング結果より作成

「ひらがな文字」「ひらがな単語」「特殊音節の単語」の相互の学習達成順序について21項目の学習課題により構成し、オーダリング分析を行い、3項目の関連

性における学習課題の達成順序について検討した。点字の書きについての学習モデルを図2に示した。「点字の書き」と「点字の読み」の学習習得モデルでは、点字の書きから点字の読みへの学習の習得の流れが指摘できるとともに、音声提示による「点字の書き」の学習習得の流れと、触読による「点字の読み」の学習習得の流れの2方向から点字学習習得が行われていることが指摘できた。

次に、学習習得の達成とコミュニケーション行動の発達の関連性を検討し、3項目ごとの学習課題における4つの習得群と点字学習を行う上で生起する問題行動についての関連についてオーダリング分析を行った。学習課題の習得の時期と問題行動の消失の時期との関連についてのモデルを図3に示した。各A群間には順序性がなく、相互に矢印があるため同時に達成されている。少なくとも、問題行動が消失する段階は「ひらがな文字」と「ひらがな単語」がB段階「1.0~2.0」と習得が進む段階とほぼ同じであることが指摘できた。

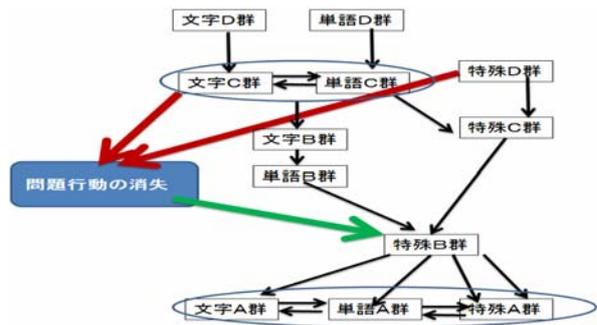


図3 「ひらがな文字」「ひらがな単語」「特殊音節単語」の学習習得評価点平均点

における4群と問題行動の消失との関連図 オーダリング結果より作成
評価点平均0-0.5,D群、0.5-1.0,C群、1.0-2.0,B群 2.0-3.0,A群と評価

IV 考察

本研究では、達成順序の結果より、具体物の触察から物の名前の点字の書きへとつなげていき、文字の意味理解を促し、さらに点字の読み(触読)へと指導が行われており、その学習の習得状況が学習把握表の結果図で示されることが考察された。また、提案された学習項目の達成モデルは、学習指導課題作成や授業の展開を図る上で、有用であることが指摘できた。点字文字は、表現のひとつの方法ではあるが、盲知的障害児の文字学習では、点字の学習が必要不可欠であるといえよう。点字文字を習得していくことで情緒の安定や外の世界への関心が芽生えてくることも指摘できる。点字学習がリテラシーの拡大に関与し、コミュニケーション行動の発達の変化と関連することも指摘できた。今後は、OJTをいかした教員の専門性の向上に活用していくことが重要だと指摘できる。